

日本体育学会
体育哲学専門分科会
会報

Vol.13(4), February, 2010

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 体育哲学専門分科会のお知らせ
- ♪ 次号予告

巻頭言

「巻頭言」という巻頭言 久保正秋（東海大学）

『会報』の第1巻第1号が発刊されたのは、1997年の5月15日のことです。この年から新たに運営委員会が設立され、その庶務会計担当運営委員である林英影先生のご尽力で産声をあげました。とりあえず『会報』と命名され、後日ふさわしい名前に改名する予定だったのですが、そのまま定着してしまいました。この文章は2001年2月、会報Vol.4(4)の「会報の4年間」(久保)と題する小文である。それから10年の歳月が流れ、この頃、中堅であった私たちも今では、会長、副会長、運営委員長などと祭り上げられ、専門分科会の「後期高齢者」となっている。今回の「巻頭言」では、初期の「会報」の「巻頭言」を取り上げ、10年以上前を振り返ってみたい。

会報の第1巻1号では、会長(石川)の「新体制の発足にあたって」、副会長(会田)の「『会報』の発刊によせて」が掲載され、第1巻2号から4号までは順次、当時の運営委員長(佐藤)、編集委員長(大橋)、学会大会企画運営委員長(久保)の文章が掲載された。実は「巻頭言」という形で掲載されるのは第2巻1号からで、その最初が「巻頭言」という名の巻頭言(片岡)である。2号は「キーノートレクチャー(科学論から見たスポーツ科学の<内>と<外>)への招待」(樋口)、3号は「運動実践の言語化」(瀧澤文)、4号は「スポーツの実践力」(滝沢康)と続く。

第3巻からの「巻頭言」では、様々な名言(?)出現した。例えば「原史人」(林)。これは「体育原理」「体育史」「スポーツ人類学」の専門分科会に属している研究者を表している(体育学会の名簿にこのように記載)。他にも「原教人」や「生バ測人」などの新人類や異星人、「原心教」などという宗教も存在した。今では「原史人」も「哲史人」、なんとなく近代化し、「哲人」も出現するようになった。この「原史人」(林:Vol.3-4)は単なる言葉の洒落ではなく「総合的な知を求めるためには『史』にも『人』にも共有可能な『原』の知を積み重ねて行かなければならない」という主張である。その他、「一生一品」(阿部:Vol.4-1)、『弱さ』のネットワーク(新保:Vol.4-3)などの意味深い表題、「巻頭言」ではないが、編集後記「天声 人後に落ちる」(久保:これは単なる洒落である)などがある。また『からだ』への関心(舛本:Vol.3-1)、「ぎっくり腰から学ぶ」(近藤:Vol.3-2)など、自らの怪我の体験を「身体論」として纏めるという、40代終盤という年齢でなければ執筆が不可能な、身体を張った名文が掲載された。さらに「新芽は冬に育つ」(服部:Vol.3-3)、「教育における身体性をめぐって」(杉山:Vol.4-2)など様々な観点から論が展開された。

そして会報第4巻4号の巻頭言は、「20世紀最後の年度を終えるに当たって」(石川:Vol.4-4)。そして21世紀を迎えた。それから10年、会報の投稿コラム「●論」に寄せら

れた「専門分科会名称改訂論」(Vol. 3-3)で論じられた名称変更は行われたが、「体育原理と体育・スポーツ哲学」という投稿(Vol. 4-3)で主張された「体育・スポーツ哲学会」との連携は未だ実現してはいない。「会報」が20周年を迎える時、「新体制」を構成した多くのものは一線を退いている。かつての箱根太陽山荘の「雲上人」を知る人もいなくなるだろう。「体育哲学(体育原理)」が何を考えてきたか、そしてこれから、何を考え、そして実践して行くべきなのか、今、問いかける必要があるのではないだろうか。

現在、茨城大学の加藤先生のご尽力で、分科会のホームページに載せるべく、「会報」のPDF化が進んでいる。完成の暁には、是非、かつての「巻頭言」を振り返ってみて欲しい、未来のために。

体育哲学考

伝えると伝わる 高根信吾(富士常葉大学)

大学院時代、出会った一冊にアリストテレス『弁論術』がある。それは指導教官の演習で使用されたテキストであったが、当時バレーボールの指導者の道を歩み始めたばかりの私は、その中で語られていることに大きな影響を受けた。

指導現場では、うまくいかないことが多い。否、ほとんどうまくいかないと言った方が適切かもしれない。たとえば、こちらが伝えたいと思うことがなかなか相手に伝わらない。恥ずかしながら、当時の指導日誌には、「なんで言っていることが伝わらないんだ」「なんで同じことを何回も言わせるんだ」というような愚痴が記されている(今も似たようなものであるが…)。選手とのコミュニケーションに問題を抱え、指導の壁にぶつかっていた私に示唆を与えてくれたのは、アリストテレス『弁論術』の説得に関する以下の部分である。

言論を通してわれわれの手で得られる説得には三つの種類がある。すなわち、一つは論者の人柄にかかっている説得であり、いま一つは聴き手の心が或る状態に置かれることによるもの、そうしてもう一つは、言論そのものにかかっているもので、言論が証明を与えている、もしくは与えているように見えることから生ずる説得である。
(1356a)

説得が成功したり、失敗したりする要因は、論者、聴き手、言論(内容)の三つに分類されるということである。アリストテレスは、「論者を信頼に値する人物と判断させるように言論が語られる場合」に説得がなされるとし、論者の人柄のよさをその要因に挙げる。そして、これが最も強力で、説得力を持つ要因であるという。確かに誰が語ったのかということは説得に大きく影響するだろう。また、「言論に導かれて聴き手の心が或る感情を抱くようになる場合」に説得がなされるとし、人は苦しんでいる時と悦んでいる時、好意的である時と憎しみを抱いている時とでは、同じ状態で判断を下すとは言えないという。同条件でも、たとえば同じ人が同じ内容を語ったとしても、聴き手に同じように伝わらないということは経験上理解できる。言論(内容)に関しては、ここで言うまでもないが、正しいことあるいは正しいと思われることは説得に有効である。

では、実際に指導者は選手を説得するために何ができるのだろうか。先ほど挙げた三つの要因ごとに考えてみよう。まずは、人柄のよさであるが、当然、指導者に不信な点があれば、選手の説得はうまくいかない。従って、指導者が発する言葉に重みを持たせるためにも、指導者は普段から信頼を得られるような言動を心がけなければならない。「あんたには言われたくないよ」などと選手に思われたら、指導はできない。次に、選手がどのような心理状態にあるのか、またどのような指導を欲しているのか観察し、把握することである。

る。選手のモチベーションが高い状態にあり、選手のニーズにマッチした指導であれば受け入れられやすい。従って、選手の心理状態やニーズを把握し、絶好のタイミングで発言することが求められるだろう。そして、選手が正しいニーズを持つように導くことも併せて求められよう。そして、指導する内容が論理的でかつわかりやすければ選手に受け入れられやすい。指導者は常にその競技に関する知識などの情報収集をし、自己研鑽を積み重ねなければならない。当たり前のことではあるが、肩書きのみに頼らず、指導者として機能している指導者が、選手の気持ちをしっかりと掴み、ニーズに応え、正しい内容を伝えることが必要である。指導現場では、さまざまな人たちの情動が直截表出しており、伝えている内容が正しいければ絶対に伝わるといような綺麗事では済まされないことが多い。だからこそ、指導者は説得に必要な三つの要因に気を配り、指導しなければならないのである。

何か理解しようとするとき、いわゆる逆転の発想をし、視点を変えることが有効になることがある。「説得」を理解する際に説得する側でなく、説得される側、つまり納得する側で理解しようとするとうわかりやすい。自分が他人から説得されて、納得する場合を想定するのである。当時、指導者の初心者であった私は指導する立場よりも、指導される立場の方がはるかに慣れており、選手としての気持ちは経験上よくわかっていた。自分はどのようなとき納得したのか、あるいはどのようなときに納得しなかったのか。そこに「説得」を理解するヒントがあったような気がする。

書籍紹介

R. Scott, Kretchmar. *Practical Philosophy of Sport. Human Kinetics. 1994.*

大橋道雄（東京学芸大学）

10数年前、在外研究員としてニューヨーク州立大学のキャロリン・トーマス先生の所に5ヶ月ほど滞在し見聞を広める機会を得た。その間、トーマス先生から米国のスポーツ哲学を専門に研究する先生方を訪問することを勧められいろいろな大学を訪れた。その中でも特に印象深い訪問先はペンシルバニア州立大学のスコット・クレッチマー先生である。滞在が冬季であり大雪の中車を走らせやつの思いでたどり着き、用意された重厚で格調の高いゲストハウスで一息入れていると先生がおいでくださった。ラウンジで淡い光の下窓の外の降り続く雪を眺めながら、米国の体育や教育事情についてお話を伺った。この折は、米国でも大学の組織変更や体育実技の扱いが問題となっていた時期であり、先生が中心となり大学の体育授業や組織を改革するためにご苦労されている様子を伺う事ができた。短い滞在であったがクレッチマー先生の真摯で几帳面お人柄に接することができたことは米国滞在の貴重な財産のひとつであると確信している。去年、国際スポーツ哲学学会で久しぶりにお会いすることができ、前述のようなことを懐かしく思い出した次第であり、本欄では先生のお人柄や熱意のこもった著書を紹介させていただく。

本章は3部から構成されている。第1部ではスポーツ哲学的技術を得るための方策や、心身の相関に関して二元論についてと調和的存在として一元論を示している。第2部では価値の問題を扱い、社会の求めているものに関して、スポーツ、ダンス、エキササイズの価値を直接的に取り上げるとともに、社会的な係わりや個人の問題の中で体力や健康に関する外在的価値と内在的価値について論を展開している。第3部では哲学的知見を応用した我々専門家の変革の方向性を考えるための方策を示す試みを行っている。

以上、クレッチマー先生の思いの詰まった本の内容に関して雑なまとめ方でしか示せない点心苦しい限りでありお許し願いたい。この本を取り上げた思いは、読者を哲学の分野へと誘い、次いでスポーツ哲学に関する知見をオーソドックスに提示し、最後に個人あるいは専門家としての方向性を変革するための示唆をも含んで示そうとする一連の流れの

手際の良さにある。また、各章毎にその章の理解度を問う設問がなされていること、その分野に関する興味を深めるための関連した著書の紹介がされていること、参考文献の豊富な点等にある。是非ご一読いただければと念じる次第である。

私の研究

田寺泰久(日本体育大学研究員)

私達の心身は社会の影響を受け、時代とともに変容してきていると言えます。フーコーが述べているように、現代社会に生きている私達は規律と訓練の中に置かれ身体は抑制されています。また、社会の発展とともに視覚など五感の連続性が失われ、分節化された身体を持つようになりました。さらに、私達は社会からさまざまな束縛を受け、心身にストレスを抱えて生きています。抑制された心身を解放できる場や時間が必要ですが、スポーツはその有効な手段の一つとなりえるでしょう。私は、スポーツにおける心身の解放に関して、現在、幼少の頃からファンである高校野球を事例として研究を行っています。

カイヨワの「聖-俗-遊」論をもとに、井上俊は、かつての青年は「俗」から「聖」の方向に離脱する傾向が強かったが、現代の青年は自由を求めたため「俗」から「遊」への離脱になったと30年以上も前に述べています。選手は、練習や試合においては「俗」から「聖」への離脱を行っています。他方、選手が若者の流行を取り入れたりチーム特有の所作などにみられるように、試合の中でも「遊」への離脱を行っている姿が見受けられます。選手は現代の若者の意識や考えを共有していることを考えると、「遊」への離脱を欲するのは自然なことだと思われれます。

遊びを「競争」、「偶然」、「模擬」、「眩暈」の4つに分類し、それぞれの対極にパイディア（遊戯）とルドゥス（競技）を配置したカイヨワの遊びの理論によれば、高校野球は「競争」と「偶然」が組み合わさった「競争-偶然」の遊びであり、厳しい規律・訓練を求めるルドゥスの要素が強くなります。厳しい練習や試合をしている選手は、時には作田啓一のいう溶解体験に入り、心身の解放に至ることがあると考えています。

また、カイヨワは、遊びは「模擬」と「眩暈」の組み合わせさせた「模擬-眩暈」から「競争-偶然」へ移り、やがて「模擬-眩暈」の遊びは衰退していくだろうと述べています。高校野球においては、選手が有名人の所作を真似たりチーム特有の所作に、また応援者の衣装・踊りなどに「模擬(-眩暈)」がみられます。

私は「聖」のみならず「遊」への離脱、および「模擬- (眩暈)」の遊びが、時には心身の解放に導くと考えています。遊への離脱および遊びの四類型の中でも「模擬(-眩暈)」に着目して、心身の解放について哲学や社会学の理論を基に、選手・応援者等の言動から考察をさらに深めたいと考えています。

運営委員会より

日本体育学会第61回大会について 新保 淳(静岡大学)

日本体育学会第61回大会 本年も一般発表への応募を宜しくお願い致します。

日程：2010年(平成22年)9月8日(水)～10日(金)

会場：中京大学 豊田キャンパス 大会ホームページ <http://www.jspehss61-chukyo.com/index.htm>

体育哲学専門分科会のお知らせ

舛本直文(首都大学東京)

平成21年度第3回定例研究会を2009年3月9日(火)に下記の要領で開催いたします。

なお、研究会終了後18時より懇親会を予定しております。会員の皆様ぜひともご参集ください。

- ・日 時 2010年3月9日(火) 10:00~17:30
- ・会 場 立正大学大崎キャンパス5号館(2階525教室)
大崎駅・五反田駅から徒歩5分、大崎広小路駅から徒歩1分
(大崎駅/JR山手線・湘南新宿ライン・埼京線・りんかい線)
(五反田駅/JR山手線・都営地下鉄浅草線)(大崎広小路駅/東急池上線)
山手通り沿い、大崎警察署の隣です。(お問い合わせは090-4207-7376 釜崎まで)

発表内容

①修士論文の部 10:00-12:00 (発表20分・質疑10分)

四反田直毅(東京学芸大学大学院): 運動部活動の在り方に関する一考察

概要: 運動部活動のあり方が問題になって久しい、加えて平成20年度の学習指導要領では「部活動」を教育の中に位置づけることが明記された、これらのことを踏まえて、体育科教育誌に載せられた文献を分析することにより運動部のあり方を検討した。

尹明進(東京学芸大学大学院): 朝鮮学校の「体育科」の目的変更の研究の課程

—「朝鮮学校の中央教育研究大会」の資料分析を中心にして—

概要: 日本において朝鮮学校の教育に関する研究は皆無であるといえよう、そこで、これまでの朝鮮学校での教育の目的や内容について歴史的に明らかにするとともに、それらの事柄に影響を及ぼした要因を探求することが研究の目的である。

井上直紀(東京学芸大学大学院): エリアスの『スポーツと文明化』における余暇論の研究—『余暇における興奮の探求』の分析・検討を中心に—

概要: 多様化した現代において余暇の問題は重要になりつつある、その問題の解決の一助として、ノルベルト・エリアスの著書に着目し、その中に示された「余暇論」を中心として分析することにより現在の課題と今後のあり方を検討した。

吉岡正史(東京学芸大学大学院): 体育とスポーツの混用問題の解決への課題と問題点に関する研究—教育現場における体育学に関するアンケート調査を踏まえて—

概要: 「体育」と「スポーツ」の用語は混用されて使われているのが現状といえよう。そこで、教育現場でのこの問題に関する実態を明らかにすると共に、「混用」問題に関する学問領域と教師の経験の関係等についても明らかにしよう試みた。

②中間報告の部 13:00-14:00 (発表20分・質疑10分)

林洋輔(筑波大学大学院): デカルト哲学における心身関係論

—身体教育論における原理論的基礎づけ—

概要: 本研究は、フランスの哲学者ルネ・デカルト(René Descartes 1596~1650)の思想研究を方法とし、体育の心身論に属する問題の解決を試みる。具体的には、体育実践における被教育者の心身関係、その理論的前提の解明を研究目的とする。そして当該問題に対し、デカルト哲学における「心身の合一」が心身関係の根本前提であるという主張を行い、これを結論とする。また、本研究の結果デカルトは肯定すべき対象として明示されるのみならず、彼の体系理解に関し、新たな解釈が示される。

重松大(筑波大学大学院): スポーツ観戦における「見る」ということの論理

概要: スポーツ観戦において、同じ場面を見ているはずの人々が、全く違うものを見ているような反応を示す場合がある。この現象を解き明かすため、ウィトゲンシュタインの「アスペクト論」を方法として用いた。アスペクト論は、「見る」ということの論理として「本質直観」、「文脈負荷性」、「熟知姓」の3点を示唆している。このこ

とを基に、スポーツを「見る」ということを、熟知性に基づくスポーツ運動の文脈負荷的直観として捉える。

③博士論文の部 14:10-16:30 (発表 30 分・質疑 10 分)

阿部悟郎 (仙台大学体育学部) : 学位論文「体育学的人間形成論序説

—シュプランガーの教育哲学を方法として—

概要 : 本発表は、筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻に提出した学位論文の概要についてである。当該論文は、その題目が示す通り、ドイツ教育学を代表するシュプランガーの教育哲学に基づきながら、体育学においてなかば恣意的に用いられてきた人間形成概念を、改めて教育学的に基礎付け、その原型理論としての構成を試みたものである。これまで育てていただいた体育哲学専門分科会に対するお礼と感謝の気持ちを込めて、学位論文の報告をさせて頂きたい。

佐々木究 (筑波大学大学院) : 学位論文「ジャン=ジャック・ルソーにおける

身体—教育の思想」

概要 : 本発表は、本年 (平成 21 年) 度、筑波大学大学院に提出した博士論文 (3 月期課程修了見込み) の要旨について報告するものである。同論文では、近代体育の成立を支えた思想的な基盤を明らかにすべく、18 世ヨーロッパの思想家ジャン=ジャック・ルソーに着目して、体育概念を構成する二大要素である「身体 (活動)」と「教育」との理論的な関係性について、彼のテキストに基づいて検討した。「身体」と「教育」とが必然的に連関する彼の論理は、後代における体育制度の展開を準備するものであるだろう。

王一民 (首都大学東京大学院) : 学位論文「2008 年北京オリンピック競技大会のオリンピック教育に関する研究」

概要 : 本研究は、2008 年北京大会の開催前後に展開された中国のオリンピック教育を歴史的に概観し、3 カ年で 3 回にわたる現地におけるアンケート調査とインタビュー調査をふまえ、その目的、政策、実施状況を明らかにするとともに、中国の独自モデルを持ち合わせたオリンピック教育の特徴と今後の課題を明らかにすることを目的としたものである。さらに、諸外国のオリンピック教育と比較し、中国の独自モデルが今後世界のオリンピック教育に寄与するための示唆を得ようとしたものである。

④スポーツ哲学セミナー 16:40-17:30 (発表 30 分・質疑 10 分)

田中愛 (武蔵大学) : シッティングバレーボールの教材的意義

—「競技」と「インクルージョン」は両立可能か?—

(「体育哲学専門分科会」と「体育・スポーツ哲学会」との合同開催企画)

次号予告!

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は釜崎太 (立正大学 : kamasaki@ris.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門分科会報第 13 巻第 3 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門分科会

大橋道雄 (会長)

編集者 阿部悟郎 (広報委員長)

発行日 平成 22 年 2 月 10 日

連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18

仙台大学体育学部

0224-55-1147 (直通)

アドレス : gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

暦の上ではもうすぐ春。春は旅立ちの時。今年度も多くの大学院生が活躍され、素晴らしい研究成果を披露してくださいました。春はそんな彼らの新たな進路を祝福する季節。後世畏るべし。みなさんのご活躍を祈念しています。そして、年度末は反省の季節。今年度もあれやこれやと反省しきり。しかし、反省はよりよき未来のために。梅は咲いたか? 桜はまだか? (A 拝)